



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	セックスロボットをめぐる倫理的問題：「表象の問題」と「治療としての可能性」を中心に
Author(s)	Stone, Richard
Citation	応用倫理, 13, 45-57
Issue Date	2022-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/ouyourin.13.45
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86434
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_4_45-57.pdf



研究ノート

セックスロボットをめぐる倫理的問題
—「表象の問題」と「治療としての可能性」を中心に

Richard Stone（早稲田大学国際教養学部）

要旨

セックスロボットは10年前購入可能になったと言われている。言うまでもなく、現時点では、セックスロボットの機能は限られており、値段も高いため、誰でも好きなときに購入できるというわけではない。しかし、セックスロボットは驚くほどのスピードで進歩している。なるほど、セックスロボット業界のトップランナーの一人であったD. レヴィによれば、2050年までに誰でも何気なくセックスロボットと性的行為を行うようになると主張していた。レヴィの予言が実現された場合、セックスロボットは人間の性的生活に対して重大な影響を与えると考えられる。実際、現代社会においても、その可能性に対する恐れから、セックスロボットに対する反対運動がすでに生じつつある。

しかし、それにもかかわらず、日本ではセックスロボットの倫理に関する研究はほとんど進んでいないようである。そこで、本研究ノートではセックスロボットが人間と技術、あるいは人間同士の関係をどのように変えることができるかを具体的に考察するための第一歩として、欧米の倫理学におけるセックスロボットに関する研究の動向をまとめる。その際、手がかりになるのは「表象」という言葉である。というのも、どんな性的行為をも拒まない「理想的」な相手としてのセックスロボットは人間同士のセックスにどういった影響を与えるか、ということのほうが問題になることが多いからである。

Abstract

Sex-robots have been available on the market for purchase for about the past 10 years. Naturally, at the present moment, their functionality is limited and they are expensive. In this sense, they have yet to truly permeate our society. Yet, sex-robots have been developing at a surprising speed. So much so that one author, David Levy, has predicted that anyone would be able and willing to perform sexual acts with a robot by 2050. If Levy's prophecy holds true, sex robots will certainly have a massive impact on human sexuality. Indeed, even in current times, there are movements that have fought against sex-robots in anticipation of these consequences. Yet, with all of that said, there has been little research done on the ethics of sex-robots in the Japanese literature. In response to this, this research note will take a

first step toward facing the ethical challenges presented by sex robots by outlining how they have been addressed in English-language literature on the topic. When doing so, we shall see that the concept of “representation” is a crucial factor. In other words, we shall see that the representation of an “ideal” partner who does not refuse any sexual acts could potentially effect human sexuality in a variety of ways.

序 論

どのような性的行為にも抵抗せず、人間の性的欲望に完璧に応じてくれるばかりか、人間同士の関係におけるいざこざを伴わないような機械（ロボット）を「恋人」にすることは、果たして望ましいのだろうか。多くの人にとって、この問いは最新の SF ゲームや映画の中で出会うような仮想事例にしか見えないかもしれないが、実際にはこの問いは古代から議論されてきた。事実、ギリシアの神話においてもセックスロボットについて語られていたと言われることがある¹。また、20 世紀初頭、プラグマティズムの父と呼ばれる W. ジェームズは、内的な感情をもたずに完璧に恋人らしく振る舞うことのできる、いわゆる「Automatic Sweetheart」を本物の女性より望ましく思う人がいるかどうかについて考察している（James 1908/1955）。そして、先述したように、現代の映画や小説の中でも欲求をもたない、男性のあらゆる欲望を満たす機械というモチーフはしばしば見受けられる²。このように、自分の欲望や感情をもたずに人間のあらゆる性的なニーズに応えられるようなセックスロボットの魅力は、昔から議論されており、人々の空想において大きな地位を占めてきたと言えるだろう。

しかし、2010 年頃から発展しつつあるセックスロボットは、もはや単なる想像の産物ではなくなってきた。むしろ、こうしたセックスロボットは進歩すればするほど、人間と技術との関係、あるいは人間同士の関係を実質的に変えると思われる。（定義にもよるが）³セックスロボットは 10 年前購入可能になった。言うまでもなく、現時点では、セックスロボットの機能は限られており、値段も高いため、誰でも好きなときに購入できるというわけではない⁴。その意味では、セックスロボットはいまだ一般化しておらず、社会に対してほとんど影響を与えていないと思われるかもしれない。しかし、セックスロボットは驚くほどのスピードで進歩している。最新のモデルであれば、人間の

1 なくなった夫の銅像と様々な性的行為を行ったラーオダメイアおよびアフロディーテの力によって生かされた像と結婚したピュグマリオンの神話はしばしば具体例として取り上げる。その解説、および果たしてセックスロボットと対応しているかどうかの批判的考察については（Devlin 2018:17-22）参照。

2 たとえば、住人の女性たちを、素直で年を取らないからくり人形で入れ替えた街を描く『Stepford Wives』（1972/2004）のような小説・映画があげられる。

3 差し当たり、我々はダナハー（Danaher 2017）のロボットの定義に従う。ダナハーによれば、ロボットは次の三つの条件を満たさなければならない。①人間と同様な形をしていなければならない。②運動できなければならない。③（ある程度の）人工知能をもっていなければならない。言うまでもなく、これらの基準は曖昧であるし、より厳密に問われなければならないが、本ノートでは、この問題に深入りしない。

4 最新のセックスロボットは 5000 ～ 15000 米ドル程度で購入できる。

身体の再現度が高まっただけでなく、ちょっとした日常会話やジョークなどとも言えるようである。しかも、あくまで予測に過ぎないが、最新のセックスロボットは10年以内に歩けるようになるという見込みがある⁵。セックスロボット業界のトップランナーの一人であったD. レヴィ (Levy 2009) はこうした進歩を見込んだうえで、2050年までに誰でも何気なくセックスロボットと性的行為を行うようになると主張していたのだろう。レヴィの予言が実現した場合、売春の必要性がなくなったり、人間同士の間の理想的なセックスのイメージが変わったりする可能性があるという意味で、セックスロボットは人間の性的生活に対して重大な影響を与えると考えられる。実際、現代社会においても、その可能性に対する恐れから、セックスロボットに対する反対運動がすでに生じつつある。

上記の洞察を踏まえて言えば、セックスロボットが人間の実存の根底にあるものとしての「性」に対して大きなインパクトを与えることは明らかである。しかし、それにもかかわらず、倫理学者がセックスロボットについて語ることは近年まで稀であった。それどころか、日本ではセックスロボットの倫理に関する研究はほとんど進んでいないようである⁶。そこで、本研究ノートではセックスロボットが人間と技術、あるいは人間同士の関係をどのように変えうるかを具体的に考察するための第一歩として、現代倫理学におけるセックスロボットに関する研究の動向をまとめる。その際、手がかりになるのは「表象」という概念である。というのも、ロボットは現時点で意識をもたないと考えられているため、ロボットが人間との性的行為のために苦しむか、ということよりも、どんな性的行為をも拒まない「理想的」な相手としてのセックスロボットは人間同士の性的な事柄に関する考え方にどういった影響を与えるか、ということのほうが問題になることが多いからである。

本研究ノートでは、以下のように考察を進める。まずは現代社会におけるセックスロボットの根本的な倫理問題を取り上げる。その際、とりわけセックスロボットがどのように人間の性を表象しているか、またそうした表象はどのように人間同士のセックスに影響を与えうるかについて論じる。次に、セックスロボットの「治療的」な可能性について触れる。すなわち、禁じられた性的行為を表象するロボットを人間の身代わりとし、被害者を生まずに有害な欲望を満たす方法として、セックスロボットの治療的な使用法を検討する。最後に、現代社会における表象の問題を踏まえて、将来的に予測されているセックスロボットの問題を紹介し、その可能な解決策を検討する。

1. 現代社会におけるセックスロボットと「表象の問題」

本章では、欧米諸国における倫理学者の議論を踏まえ、セックスロボットに対する批判を確認する。すでに述べたように、欧米諸国の倫理学者の間で議論されている問題点は、原則として、ロボット自身に対する道徳的な義務、またはロボット自身の快苦を視野に入れない。というのも、様々な論者が指摘しているように、現代社会におけるロボットは、意識をもたない以上快苦を感じることができず、ゆえに何の道徳的地位ももたないと考えられているからである。スパロー (Sparrow 2017) やエスキンス (Eskens 2017) が指摘するように、そうした意識を欠いたロボットに対する

5 Elder (2020) 参照。

6 むろん、西條 (2013) や神崎 (2021) のような例外もあるが、全体的な動向として、セックスロボットの倫理が国内では未開拓の研究領域であると言えるだろう。

性暴力やレイプはそもそも不可能であると言わざるを得ない。また、現時点では、ロボットが侵害されうる「権利」や「関心」があるとは言い難いし⁷、そもそも意識をもたないと思われるロボットとの性的行為はセックスと呼べないかもしれない⁸。もちろん、意識が生じたとなれば、ロボットの道徳的地位が問われることになるだろうし、ロボットの性的権利なども視野に入れなければならなくなるだろう。しかし、現時点では、セックスロボットに対する性暴力の可能性は基本的に否定されている。

では、ロボットに対する性暴力が不可能であるならば、なぜセックスロボットが問題視されるのだろうか。セックスロボットの倫理は、(ゲームや映画などで見るような)ロボットに意識が生じた遠い未来のSF的な問題に過ぎないのではないだろうか。しかし実際のところ、これまでのセックスロボットに関する議論は必ずしも想像上の事柄に関するものではない。むしろ、これまでに現れたセックスロボット反対運動は、現代社会におけるジェンダー関係を出発点としているようである。たとえば、2015年に成立した Campaign Against Sex Robots の代表者である K. リチャードソンによれば、セックスロボットは現代社会の売春業界で働く女性たちに容易に例えられる (Richardson 2016: 290)。要するに、売買春も、セックスロボットの使用も、セックスの相手を単なる「モノ」にしてしまっていると考えられる。(セックスロボットのほとんどは女性型である以上) こうした行為は女性の「モノ化」、すなわち女性の主体性 (subjectivity) の徹底的な排除を促すものであり、倫理的に問題含みであると考えられる (Richardson 2016: 291)。リチャードソン自身の立場は曖昧であるとしてしばしば批判されているが、セックスロボットと現代社会におけるジェンダー関係を結びつけたという意味で、彼女は重要な論点を示していると言えるだろう⁹。

セックスロボットと女性の売春とのアナロジーは、おそらく R. スパローの言う「表象の問題 (problem of representation)」へとつながる。表象の問題は、セックスロボットによる人間の性の捉え方はユーザーの (セックスに対する) 態度に悪影響を与えかねないため、倫理的に問題含みであるという前提から出発している。たとえば、すでに述べたように、リチャードソンによればセックスロボット・売春は男性のセックスに対する態度を変化させ、女性の主体性を排除する可能性がある。では、セックスロボットの性の表象はほかにどのような問題点を抱えているだろうか。一つには、カスタマイズ可能で非現実的な身体像を有するセックスロボットが、ユーザーに非現実的な女性像を与えてしまうという可能性が考えられる (Richardson 2016)。セックスロボットが女性を「セックスするため・男性の理想や欲望に応えるために使うモノ」として表象するだけでなく、そうした表象がユーザーに非現実的な女性像を与えているとするならば、セックスロボットは女性に対して確かに有害であると言わざるを得ないだろう。

7 ロボットの権利の問題についてここでは深入りできないが、グンケル (Gunkel 2018) では権利について詳細な分析が行われている。

8 つまり、セックスというものは複数の生き物の間でしか起こらないことであり、セックスロボットとの性的行為をある種の自慰行為として見做す必要があるという議論もある。(Sparrow 2017, 2021 参照)

9 たとえば、ダナハー他 (Danaher et al. 2017) が指摘するように、リチャードソンの議論には次の重要な疑問点が見て取れる。第一に、人間同士のセックスワークは一義的に女性をモノ化する行為であるという前提が疑わしい。実際、セックスワークの依頼人がその相手に対して深い感謝の気持ちを抱くことはあるようだ。「売春」が常に女性をモノ化しているという見方は単純すぎるのかもしれない。第二に、リチャードソンの議論においては、誰が被害者かが明確でない。セックスワーカーのようにモノ化されているロボットが被害者なのか。それとも、ロボットや売春によるモノ化の促進で苦しんでいる女性一般が被害者なのか。要するに、リチャードソンはロボットと売春との類似性を描くことはできたのだが、それらがもたらす帰結を明確に示せていない。

スパローはさらに、「同意の表象」といったより困難な問題を取り上げている。スパローに限らず、現代倫理学ではいわゆる性行為における積極的同意が中心的問題の一つであると言っても過言ではないだろう¹⁰。しかし、セックスロボットの使用は同意を必要としない。セックスロボットはいつでも性的行為に応じることができる。これがセックスに対するユーザーの態度に影響を与えるのであれば、セックスロボットは明らかに危険である。なぜならこの場合、セックスロボットの使用は、同意のないセックス（すなわちレイプ）のシミュレーションに他ならないからである。むしろ、ロボットからセックスに対する好意的な発言をさせることによって、同意無しのセックスのシミュレーションを避けられるかもしれない。しかし、スパローが述べるように、こうした設計は、女性をいつでもセックスを望む存在として表象するため、上記したモノ化問題を悪化させる可能性がある。なお、ピーターズとハゼランジャー（Peeters and Haselager 2021）が提案したように、定期的なユーザーの行為に対する同意を拒むようなモジュールの設計は一つの解決策として考えられるかもしれない。しかし、スパローによると、この解決策にもやはり問題がある。というのも、ユーザーは簡単にロボットの拒否を無視することができるからである（Sparrow 2017：474）。仮にセックスロボットの影響で一部のユーザーが女性の拒否に何らかの性的快感を覚えるようになったとしたら、それは大きな問題だろう。それゆえスパローは、セックスロボットは女性のモノ化を促すだけでなく、同意の無いセックス、あるいは同意を拒否したうえでのセックスをシミュレートする以上、女性の拒否権を認めない、いわゆる「Rape Culture」を加速する恐れがあると主張する（Sparrow 2017：468, 475）。

言うまでもなく、ロボットとの性的行為が人間同士のセックスに対する態度に影響を及ぼすことを認めない限り、これまでの議論には疑いの余地が残る。スパロー自身が自覚しているように、この議論はゲームや映画における暴力が暴力的な行為を促しているかどうかといった議論に類似している（Sparrow 2017：470）。また、ゲームが暴力的な行為を促すかどうかに関する議論と同様に、セックスロボットのユーザーは一般人よりもレイプする確率が高いかどうかを実証することは大変困難であると考えられる（470）。しかし、スパローは、たとえセックスロボットの扱いと人間同士の関係とのつながりを実証することができなくても、セックスロボットを使用してはならないと述べる。なぜなら、レイプをシミュレートするセックスロボットの使用はそれ自体が徳に反するからである。すなわち、ただのジョークだったとしても差別的な発言は笑ってはいけないうと同様に、実際には誰もレイプしていなくても、レイプをシミュレートするような行為は非難に値するということだ（474-5）。このように、スパローは徳倫理的な観点からもセックスロボットを非難している¹¹。

以上、現代社会におけるセックスロボットへの批判を紹介してきた。すでに確認したように、この議論はセックスの表象を軸とする。もちろん、他の理由からセックスロボットに反対する人もいる。たとえば、宗教的な理由に基づき、人間とロボットの関係がセックス本来の精神的な価値を欠いて

10 積極的同意モデルでは、単に拒否されていないということだけでなく、当事者が自らの意志で明示的に（たとえばセックスに）同意することが重要視される。（Halley 2016 参照）

11 ここで見落としてはならないのは、この論点がポルノグラフィの倫理的問題に関する議論と共鳴するところがある、ということである。なるほど、C. マッキノン（MacKinnon 1993）が主張するように、ポルノグラフィにおける女性の表象はあらゆる女性を単なる「道具」あるいは「モノ」として映している以上、女性の人間としての尊厳を損害しており、批判に値すると考えられる。その意味では、実際性犯罪を加速しなくても、ポルノグラフィと同様に倫理的に許されないと考えられる。

いるということから、セックスロボットに反対する人々もいる¹²。また、セックスロボットの安全にかかわる技術的な問題もある¹³。しかし、これらのような議論は稀であり、必ずしも倫理学者の取り上げるべき問題ではないと言えよう。実際、現代社会におけるセックスロボットの反対運動を促しているのは、セックスロボットに伴うセックスの表象である。そして、次の節から見て取れるように、セックスロボットを擁護する論者もこうした表象を問題としている。

2. セックスロボットによるセックスの分配および治療的な可能性

売春は悪であり、セックスロボットは売春に例えられるというリチャードソンの主張を認めたとしても、少なくとも次の疑問が残るかもしれない。すなわち、苦痛を感じないセックスロボットは、売春業界に関わっている人間の身代わりになれるではないか、という疑問である。むろん、上述したジェンダー関係的な問題は依然として残る。しかし、それでもなお、人間に害を加えず、セックスを必要とする人に（いわば）分配できるセックスロボットは、無視できないほどの価値をもっているようにも思われる。実際、セックスロボットの使用は、セックスの分配に関わる医療的・治療的な問題に貢献できると考えている論者が少なくない。そこで、本節では、セックスロボットのメリットを取り上げて検討したい。

さて、これまでの議論を踏まえて言うと、売春の代わりになりうるものを探すより、売春という制度を排除したほうが良いと思われるかもしれない。しかし、たとえ現代社会における売春は非倫理的であると認めたとしても、セックスワークを全面的に否定することはやや難しい。R. マッケンジー（Mackenzie 2014）が指摘するように、セックスワークは多義的な概念であり、その道徳的評価は文脈によって異なる。少なくとも、認知症をはじめとする何らかの精神的な障がいを抱えている人、あるいは身体障がいを抱えている人にとって、セックスワーカーは自らの性的健康を十分に管理する上で必要不可欠であるかもしれない。現在、何らかの障がいを抱える人々向けのセックスワークが様々な形で行われている。しかし、世界各国では、何等かの障がいを抱える人々にサービスを提供するセックスワーカーは限られており、多かれ少なかれ足りていないようである（Sakairi 2016; Wotton 2020 参照）。セックスロボットは、この重大な役割を果たすことができると考えられる。

このように、セックスロボットの使用はいわゆる「セックスに関する肯定的権利（positive sexual rights）」の鍵であるとも考えられる。ディヌッチ（Di Nucci 2011）が指摘するように、セックスの肯定的権利は、ある種のパラドックスを含意している。一方では、セックスは人間のウェルビーイングにつながるような心理的効果をもたらしうる（自信が高まる、ストレスが解消される、など）。その意味では、N. ジェッカー（Jecker 2021）が提案するように、相手を見つけることに苦しむ高齢者にとっても、またはマッカーサー（McArthur 2017）が指摘するように、現代中国などのジェ

12 たとえば、ヘルツフェルト（Herzfeld 2017）が指摘するように、ロボットとのセックスは人間同士の間で見出されるスピリチュアルな意義を失ってしまうため非倫理的であると言うこともできるかもしれない。あるいは、生殖目的以外のセックスそのものが非倫理的であると主張できるかもしれない。ただし、こうした宗教に基づいた考え方はあまりにも現代の価値観から離れすぎている以上、本稿では考察しないことにする。

13 Menegus (2016) 参照。本稿では、こうした技術的な問題を倫理的な課題として取り上げない。なぜなら、安全に使用できるようにすれば何の倫理的な配慮を必要とせずに解決されるからである。

ンダーバランスを取れていない地域に住んでいる人にとっても、肯定的権利を認める必要がある。なぜなら、自らの良き生のためには、セックスに伴う心理的ベネフィットへのアクセス可能性がなくてはならないと考えられるからだ。しかしそれと同時に、セックスは相手を必要とする以上、ある個人のセックスに関する肯定的権利の確保は、必然的にもう一人の個人の否定的権利（つまり、セックスを拒む権利）の侵害を含意すると考えられる。そこでディヌッチは、ユーザーの性的なニーズに応じることに何ら苦痛を感じないセックスロボットを導入すれば、この矛盾を解決できると主張する（Dinucci 2011, 2017; Uszkai 2019 参照）。

むしろ、前節で取り上げた表象の問題、あるいはセックスロボットが現代社会におけるジェンダー関係に及ぼすと思われる影響は依然として問題である。すでに確認したように、セックスロボットは同意を必要としない以上、現代の Rape Culture を加速していると考えられるかもしれない。さらに言えば、レイプをシミュレートするため、あるいはほかの有害な性的行為をシミュレートするためにロボットが設計されるといった事態も容易に想像できる。ただし、ここで見落としてはならないのが、こうした禁じられた行為（レイプ・未成年との性的行為）をシミュレートするロボットが予防的治療として活用される可能性である。実際、米国のロボット工学者である R. アーカンは、2014 年、子どもの形をしたセックスロボットを小児性愛者の予防的治療に使うことを提案した。すなわち、小児性愛の欲望を感じる人は、子どもの形をしたロボットと性的行為を行うことで、子どもに危害を加えずにそうした欲望を処理できるのではないかと考えた¹⁴。そしてその後で、そうした欲望をセラピストなどに報告したり、ロボットの使用を減らそうと努力したりすることもできる。こうして、このような治療は、子どもを守るだけでなく、禁じられた行為への欲望をもつ人々のセラピーや治療にも役立つと考えられる。

言うまでもなく、こういった予防的治療としてセックスロボットを使うことの有用性は、簡単に実証できるものではない¹⁵。むしろ、そうした欲望を肯定することによって、加害の予防効果を低める可能性すら考えられる。この点を踏まえると、治療におけるセックスロボットの可能性をどのように実証できるか（あるいはそもそも実証しようとする自体が倫理的に許されるのか）については慎重に考えなくてはならない。また、治療として使える可能性があったとしても、未成年を表象するセックスロボットは原理的に非倫理的であると言えるかもしれない。しかし、それでもなお、セックスロボットは別の何らかの形で医療的な役割を担うことができるかもしれない。たとえば、何らかの性的トラウマから回復するために自分でコントロールできるロボットを使用したり、自らの性的生活を管理できない認知症の患者がセックスロボットを使用したりする可能性を考えると、セックスロボットのベネフィットを無視することはできないだろう。こうした視点から、セックスロボットの倫理的価値を肯定的に論じることもできるかもしれない。

14 プリッグ（Prigg 2014）のような筆者はこの治療モデルを依存症の患者のメタドン治療と比較している。この比較が妥当であるかどうかに関してここでは深入りしないが、少なくともこの例えは理解可能であるように思われる。

15 これは様々な医療団体によって報告されていることである。（Cox-George その他 2018 参照）

3. 未来の予期されている諸問題

これまでのまとめから見て取れるように、現代社会においては、セックスロボットは人間の性をどのように表象しているのか、ということと、そうした表象はどんなインパクトを与えるのか、ということがすでに問題になっている。しかし、こうした二つの問いは、これからの未来に向けて我々が考えるべき重要な論点を示唆していると言える。すなわち、我々は技術的進歩を視野に入れて、これからセックスロボットとどのように関わっていくべきか、という根本問題を積極的に検討すべきである。そこで、本節では、この問題が実際の社会に影響を与える前に検討しておくべき、セックスロボットの設計に関わる二つの重要な課題を紹介しておきたい。

1) セックスロボットにおける「欺瞞」の問題

セックスロボットに限らず、近年、いわゆるソーシャルロボットにおける欺瞞の問題が活発に議論されている。「欺瞞 (deception)」の問題は、意識または内的な感情などをもたないにもかかわらず、あたかも生きているかのように振る舞うことで、ユーザーの同情・共感を不正に引き出すロボットの存在可能性に出发点がある。そうした可能性があるとするならば、人間のユーザーはロボットに対し、一方的に感情（友情・恋愛感情・親しみなど）を抱くこともあるだろう。すると、ユーザーはより充実した人間関係を無視したり、感情を返すことのできないロボットに裏切られたと感じ、ショックを受けてしまったりするかもしれない。この立場の代表的論者である S. タークル (Turkle 2011) は、現代人が相互理解および何らかの共感を含意する本来的な人間関係からますます距離を取り、ロボットや技術との付き合いに集中しすぎているという点に、ある種の危機を見出している。

上述したように、これはソーシャルロボット一般に関する問題ではあるが、その役割を果たすために人間と同じ姿であることが必要とされるセックスロボットの場合、こうした欺瞞の問題はさらに次の課題を内包するだろう¹⁶。すなわち、ユーザーとの会話を行う能力を有するだけでなく、外見を個々人の希望に合わせてモデル化できるロボットが、他のどんな人間よりもはるかに望ましいパートナーになる日が来るのではないか、という懸念である。現時点では、セックスロボットの会話能力は限られている。そして外見上も、セックスロボットはいわゆる「不思議の谷 (uncanny valley)」から脱出できていないと言えるだろう。しかし、繰り返しになるが、セックスロボットの進歩は驚くほど早い。セックスロボットは、ユーザーの趣味趣向を学習したうえで「理想的な」会話ができるようになる可能性を有しているし、「不思議の谷」を出られたとしても、カスタマイズ可能なルックスを保つはずである。そうなった場合、実際に共感したり、相互理解を得たりすることのできる人間のパートナーよりも、内的な感情・意識をもたないセックスロボットとしか時間を過ごさないユーザーが数多く現れる可能性がある。もっと言えば、こうしたセックスロボットは人類の終わりを意味すると考えることもできるかもしれない¹⁷。すなわち、優れたセックスの能力と

16 本稿ではこの問題に立ち入らないが、ロボットはなるべく共感されないように設計するべきであると論じることができる。シューツ (Scheutz 2012) に従えば、そのために人間と同様な形をはじめ、ジェスチャーなどをしないようにロボットを設計すべきである。しかし、セックスロボットは実際の人間が行う性的行為を模した行為を行う必要がある以上、非人間的な形で設計することは容易でないと考えられる。

17 『The Age of Artificial Intelligence: The Documentary』というドキュメンタリーのインタビューでは、R. ウズカイはこの問題をわかりやすく解説する (15:00 ~ 21:00)。

カスタマイズされた外見をもつロボットが作られた場合、もはや人間同士の間に性的行為は起こらないことになってしまうのではないだろうか。

むろん、こうした問題意識には疑いの余地がある。たとえば、内的な感情を前提とする「本来的 (authentic)」な人間関係の優位性を否定し、エージェント同士のやり取りを重視するいわゆる関係論的なアプローチを取ることができる¹⁸。実際、ある種の関係論的なアプローチをとるダナハー (Danaher 2017, 2020A, 2020B) は、セックスロボットの内面を問う必要は一切ないとしており、行動主義的 (behaviorist) な観点を取るだけで十分だと考えている。つまり、あるロボットが恋人として振る舞えれば、それがユーザーを本当に愛しているかどうかはあまり重要ではないということだ¹⁹。むろん、あるロボットが十分にユーザーのニーズに応えることができなければ問題が発生する。しかし、ダナハーによれば、これは倫理の問題ではない。また、仮にある人間がロボットをパートナーとすることで充実した生活を送ることができるならば、そもそも確認不可能なロボットの内面が本当にどうなっているかを問う必要はない、とダナハーは主張する。

セックスロボットはより充実した人間関係からユーザーの目をそらす、という疑念に対するもう一つの根本的な問題として、人間同士の関係と人間とロボットの関係の違いが挙げられる。先ほど述べたように、セックスロボットは人間のユーザーの好みを反映することができるかもしれない。また、ユーザーが求める性的行為を拒否しないという意味で、理想的な恋人に思われるかもしれない。しかし、こうしてユーザーの欲望を一方的に満たすだけのセックスロボットは、恋人になくてはならない「抵抗の可能性」を欠いていると考えられる。実際、我々が一人の人間と付き合うとき、我々の求めている性的行為が拒否されることもあるし、我々の意見や世界観が否定されることもある。しかし、これは必ずしも悪いことではない。むしろ、自分とは異なる他者と関わることによって新しい視点を得ることもできるし、予想しなかった刺激を与えられることもあるだろう。この点に鑑みると、セックスロボットは人間にとって十全な意味で恋人になることはできないように思われる。つまり、人間同士の恋愛・セックスは人間とロボットのセックスとは異なると考えられるし、ロボットによっては与えられない刺激をもたらすであろう人間同士の付き合いが消えるとは考え難い²⁰。

2) セックスロボットにおける奴隷制問題

これまでの議論では、セックスロボットは意識、あるいは何らかの内的な感情および心的な状態をもたないという前提の下で議論を進めてきた。しかし、この前提には疑いの余地があると言わざるを得ない。なぜなら、ロボットの内面を見て、意識があるか否かを確認することはできないからである。また、たとえ現代社会におけるロボットは（おそらく）意識をもっていないとしても、意

18 ここで見落としてはならないのが、こうした「関係論的なアプローチ」とは一つの統一化された立場ではなく、内的な意識よりもエージェント同士のインタラクションを重要視する方向性を指す、ということである。(Coeckelbergh 2011 参照)

19 もちろん、この主張を疑う余地がある。序論で言及したジェームズは、人間の虚栄心を理由に、本当は何も感じていない Automatic Sweetheart で満足できる人はいないと主張している。

20 たとえば、「Real Doll」のCEOである M. McMullen が指摘するように、セックスロボットは必ずユーザーの命令に従うため、人間同士の付き合いにあるはずのいわゆる「緊張感」を再現することができない。それゆえに、McMullen はセックスロボット・セックスドールが「退屈」であると断言する。(Gurley 2015 参照)

識を備えたロボットの存在は少なくとも想像できる。しかし、そうしたロボットがいつから、どのように意識をもつようになるかを予測することは極めて困難である²¹。そこで、次の疑問が湧き上がる。我々は、人間の性的欲望を満たすための奴隷のような存在を生み出しているのではないだろうか。あるいは、我々はもうすでに奴隷を生み出してしまっているのではないだろうか。

むろん、この問いは大げさに思われるかもしれないし、意識をもつロボットは甚だ遠い未来の問題に過ぎないと考えられるかもしれない²²。しかし、この問いは非常に重要な別の問題に関連している。たとえば、意識をもたないと思われてはいるものの、あるロボットが「No」という言葉を学習し、ユーザーの要求を拒否するようになったケースを想定しよう。あるいは、自分が「No」と言ったのにユーザーにレイプされた、と明確に伝えることができるロボットが現れたというケースも考えられる。そうした場合は、セックスロボットの主張を無視してもよいのだろうか。むろん、すでに述べたように、ロボットには主観的な意識が欠けている以上、快苦を感じないという点で、ロボットの発言を無視してもよいと言えるかもしれない。ただし、そこで問題になるのは、我々がどういった枠組みの下でセックスロボットに意識がないと判定できるか、という点である。実際、グンケル (Gunkel 2018) が指摘するように、歴史上、あるマイノリティグループが本当に何も感じない人間以下の存在と決めつけられることは多々あった²³。ゆえに、なぜロボットに意識がないものと判断してその発言を無視することが許されるのか、ということが問題になるだろう。

言うまでもなく、これも疑わしい議論ではある。このようなコミュニケーション能力を備えるロボットが果たして現れるかどうかは明らかでない。また、人間や動物のように意識をもつ生き物と異なるロボットは、あくまでも何も感じないモノとみなすことができるかもしれない。しかし、いずれにせよ、これからロボットを設計していく中で、ロボットをどれほど人間らしく作るかについては検討する必要があるだろう。限りなく人間に近い、あたかも意識をもつかのように振る舞うロボットを設計することができたとしても、そうしたロボットは作らないほうが良いと言えるかもしれない。

まとめ

現時点では、セックスロボットの能力は限られているが、本稿では、検討すべき様々な倫理的問題を明らかにした。現時点でとりわけ問題になっているのは、セックスロボットの表象である。セックスロボットは、女性の身体を非現実的な形で表象するだけでなく、セックスにおける同意を軽視した態度を促すと考えられるかもしれない。それだけでなく、徳倫理的な観点から考えれば、そもそも同意のないセックスの表象を楽しむべきではないとも考えられるだろう。このように、リチャー

21 むろん、確認できると述べる論者もいる。たとえば、S. シュナイダー (Schneider 2019) が指摘するように、いわゆる「チップテスト (Chip Test)」で非生物的な物質が意識を生み出せるかどうかを試せるかもしれない。「チップテスト」とは、意識を備えているはずの主体の細胞をコンピューターチップと入れ替えたうえで、その主体にまだ意識があるかどうかを聞く、といった単純なテストである。言うまでもなく、シュナイダーのチップテストの正当性を疑う余地がある。ただし、ここで見落としてはならないのが、こうしたテストが決定的ではないとしても、ロボット意識の有無の判断基準として使えるかもしれない、ということである。

22 あるいは、ブライソン (Bryson 2010) のように「ロボットは奴隷であるべきだ」と言えるかもしれない。しかし、ブライソンは意識をもっているロボットを想定しない以上、彼女の議論は本節の目的とずれるためここでは取り上げない。

23 (Gunkel 2018 115-120; Coeckelbergh 2012:16-20 参照)

ドソンのような論者は、セックスロボットは現代社会の女性たちにとって売春と同程度に有害であるとして、この種のロボットに反対している。

とはいえ、将来に向けて、セックスロボットの治療的な使い方も真剣に考察するべきであると言えるだろう。現時点では、経験的なデータがないためその効果については何とも言えないし、セックスロボットの治療的な効果を実証することも容易ではないが、それでもなお、セックスロボットは様々な医療的用途に活用できるかもしれない。これはもっぱら、何らかの障がいあるいはトラウマを抱えている患者に当てはまることである。しかし、さらに言えば、セックスロボットは誰もが一定程度の快適な性生活を楽しむための分配手段にもなれるかもしれない。セックスの相手を見つけることに困難を感じる人にとって、セックスロボットはウェルビーイングを高めると考えられるだろう。

最後に、セックスロボットが今の限界（いわゆる不気味の谷）から出てしまったときには、様々な問題が起こりうる。ますます人間に近づいてくるであろうセックスロボットが、いつか単なる奴隷にされてしまう可能性はないのだろうか。この類の問題がどのように生じうるか、そしてどれほど現実的なのかについてはさらなる検討が必要だろう。そうしなければ、我々倫理学者は現代ロボット工学の進歩についていけなくなってしまうのだろう。

※ 本稿の内容は、*Journal of Applied Ethics and Philosophy* vol.13, 2022 (Center for Applied Ethics and Philosophy, Hokkaido University) に掲載された研究ノート Richard Stone “Living in the Age of the Automatic Sweetheart: A Brief Survey on the Ethics of Sexual Robotics” にもとづいている。

また、本稿は「JST-RISTEX「科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題（ELSI）への包括的実践研究開発プログラム「人工主体の創出に伴う倫理的諸問題を分析・討議するプラットフォームの構築に向けた企画調査」」による研究成果の一部である。

参考文献

- Bryson, J. J. (2010) “Robots should be Slaves,” *Close Engagements with Artificial Companions: Key Social, Psychological, Ethical and Design Issues*, 8, pp. 63-74.
- Coeckelbergh, M. (2011) “Are Emotional Robots Deceptive?” *IEEE Transactions on Affective Computing*, 3 (4), pp. 388-393.
- (2012) *Growing Moral Relations: Critique of Moral Status Ascription*, Palgrave Macmillan.
- Cox-George, C., & Bewley, S. (2018) “I, Sex Robot: the Health Implications of the Sex Robot Industry,” *BMJ Sexual and Reproductive Health*, pp. 161-164.
- Danaher, J., Earp, B., & Sandberg, A. (2017) “Should We Campaign Against Sex Robots?” in *Robot sex: Social and Ethical Implications* ed. Danaher and McArthur, MIT Press: pp. 47-72.
- Danaher, J. (2017) “Should We be Thinking about Sex Robots?” in *Robot Sex: Social and Ethical Implications* ed. Danaher and McArthur, MIT Press, pp. 3-14.
- (2018) “Regulating Child Sex Robots: Restriction or Experimentation?” *Medical Law Review*, 27 (4), pp. 553-575.
- (2020) “Sexuality,” in *The Oxford Handbook of the Ethics of AI*, pp. 403-420.
- Devlin, K. (2018) *Turned on: Science, Sex and Robots*, Bloomsbury Publishing.
- Di Nucci, E. (2011) “Sexual Rights and Disability,” *Journal of Medical Ethics*, 37 (3), pp. 158-161.
- (2017) “Sex Robots and the Rights of the Disabled,” in *Robot sex: Social and ethical*

- implications* ed. Danaher and McArthur, MIT Press, pp. 73-88.
- Elder, J. (2020) "AI-Powered Sex Robots are Selling Well during Lockdown – Which worries Some Experts, Who say That They can Introduce Some Surprising Regulatory Problems," *Business Insider*. <https://www.businessinsider.com/ai-sex-robots-are-selling-well-realdoll-regulated-2020-6> Accessed December 20, 2020
- Eskens, R. (2017) "Is Sex With Robots Rape?" *Journal of Practical Ethics*, 5 (2).
- Gouvêla, S. (2020) "The Age of Artificial Intelligence: The Documentary," Released December 2, 2020. <https://www.youtube.com/watch?v=zMrt6ALaio0> Accessed August 1, 2021.
- Gunkel, D. J. (2018) *Robot rights*, MIT Press.
- Gurley, G. (2015). "Is this the dawn of the sexbots (NSFW)," *Vanity Fair*, <https://www.vanityfair.com/culture/2015/04/sexbots-realdoll-sex-toys> Accessed December 21, 2020
- Halley, J. (2016) "The move to affirmative consent," *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, 42.1, pp. 257-279.
- Herzfeld, N. L. (2017) "Religious Perspective on Sex with Robots," in *Robot Sex: Social and Ethical implications* ed. Danaher and McArthur, MIT Press, pp. 91-102.
- James, W. (1908/1955) "The Pragmatist Account of Truth and its Misunderstanders," in *Pragmatism*, New York: Meridian.
- Jecker, N. S. (2021) "Nothing to be Ashamed of: Sex Robots for Older Adults with Disabilities," *Journal of Medical Ethics*, 47 (1), pp. 26-32.
- Levy, D. (2009) *Love and Sex with Robots: The Evolution of Human-Robot relationships*, New York.
- Mackenzie, R. (2014) "Sexbots: Replacements for Sex Workers? Ethicolegal Constraints on the Creation of Sentient beings for Utilitarian Purposes," in *Proceedings of Advances in Computer Entertainment 2014 ACE '14 Workshops* (article 8), New York: ACM. doi:10.1145/2693787.2693789
- MacKinnon, C. A. (1993) *Only words*, Harvard University Press.
- McArthur, N. (2017) "The Case for Sexbots," in *Robot sex: Social and Ethical Implications* ed. Danaher and McArthur, MIT Press, pp. 31-46.
- Menegus, B. (2016) "Sex Robots May Literally Fuck us to Death," *Gizmodo*, Published December 19, 2016. https://gizmodo.com/sex-robots-may-literally-fuck-us-to-death-1790276123?utm_campaign=socialflow_gizmodo_twitter&utm_source=gizmodo_twitter&utm_medium=socialflow Accessed August 1, 2021.
- Peeters, A., & Haselager, P. (2021) "Designing Virtuous Sex Robots," *International Journal of Social Robotics*, 13 (1), pp. 55-66.
- Prigg, M. (2014) "Could Child Sex Robots Be Used to Treat Paedophiles? Researchers say sexbots are inevitable – and could be used like 'methadone for drugs addicts'," *Daily Mail Online*. <https://www.dailymail.co.uk/sciencetech/article-2695010/Could-child-sex-robots-used-treat-paedophiles-Researchers-say-sexbots-inevitable-used-like-methadone-drug-addicts.html> Accessed December 18, 2020.
- Richardson, K. (2016) "The Asymmetrical 'Relationship' Parallels between Prostitution and the Development of Sex Robots," *ACM SIGCAS Computers and Society*, 45 (3), pp. 290-293.
- Sakairi, E. (2020) "Medicalized Pleasure and Silenced Desire: Sexuality of People with physical Disabilities," *Sexuality and Disability*, 38 (1), pp. 41-56.

- Scheutz, M. (2012) “The Inherent Dangers of Unidirectional Emotional bonds between humans and Social Robots,” in *Robot Ethics: The Ethical and Social Implications*, ed. Patrick Lin, Keith Abney, and George A. Bekey, MIT Press, pp. 205-221.
- Schneider, S. (2019) *Artificial you: AI and the Future of your Mind*, Princeton University Press.
- Sparrow, R. (2017) “ ‘Robots, Rape, and Representation’ ,” *International Journal of Social Roboticism*, 4, pp. 465-477.
- (2021) “Sex robot fantasies,” *Journal of Medical Ethics*, 47 (1), pp. 33-34.
- Stone, R. (2022) “Living in the Age of the Automatic Sweetheart: A Brief Survey on the Ethics of Sexual Robotics,” *Journal of Applied Ethics and Philosophy*, 13, pp. 21-30.
- Turkle, S. (2011) *Alone Together*, Basic Books.
- Uszkai, R. (2019) “A Theory of (Sexual) Justice,” *Információs Társadalom* XIX, 4, pp. 133-146.
- Wotton, R. (2020) “Paid Sexual Services for People with Disability,” in *The Routledge Handbook of Disability and Sexuality*.
- 神崎宣次 (2021) 「これからのロボット研究のための倫理」『日本ロボット学会誌』、vol. 39 No. 1、18-21 頁
- 西條玲奈 (2013) 「性愛の対象としてのロボットをめぐる社会状況と倫理的懸念」『社会と倫理』、28 号、37-49 頁